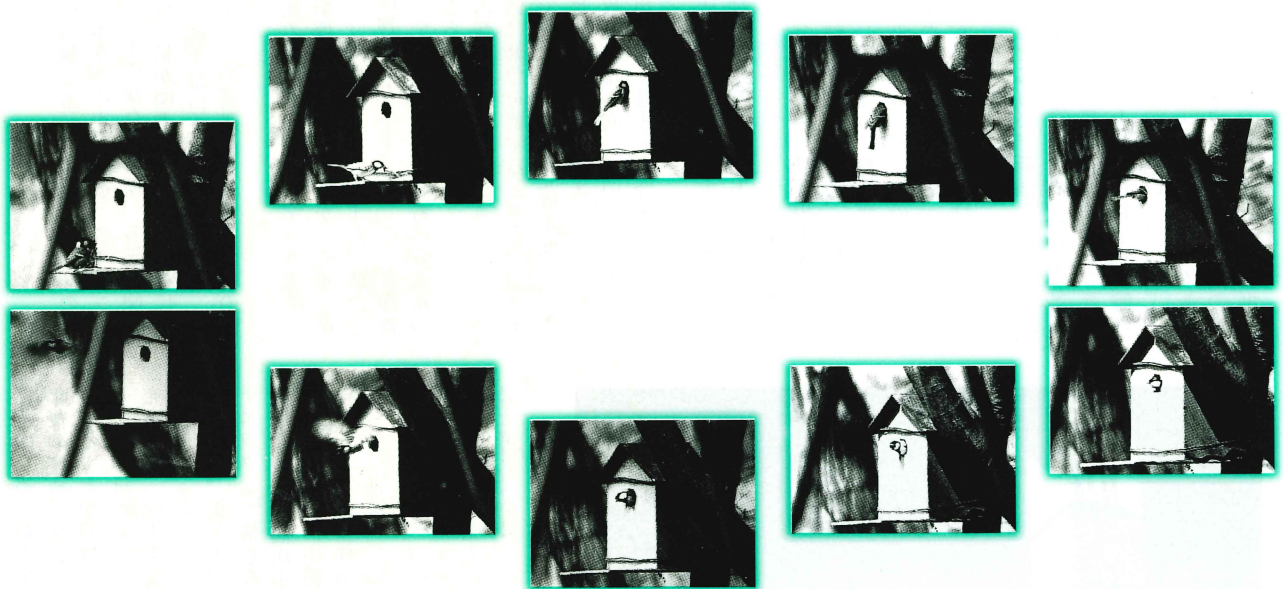


SEMIMAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.154

1999.1・2・3

■わが大学		ご入会ありがとうございました	／11
早稲田大学 総長 奥島孝康	／2	会費ありがとうございます	／11
■のこす言葉——原・福田・蠟山委員のご退任を記念して——	／3・4・5	■おたより	／11・12
■教育プログラム報告	／6・7	■追悼	／12
1. 第17回大学教員研修プログラム		■寄贈図書	／12
2. 第2回土曜セミナー		■寄付	／12
3. 第179回大学共同セミナー		■ひとこと	／12
■平成10年度 教育プログラム白書	／8	■業務通信	／13・14
■平成10年度 業務白書	／9	わたしたちの合宿	
■法人ニュース	／10	私の国際交流	
理事会・評議員会報告・教育プログラム委員会報告・		■花ごよみ	／14
平成11年度収支予算書（一般会計・千人会）		■利用状況	／14・15
■千人会		■開催予告・出版書籍案内	／15・16
		■館長室から	／16



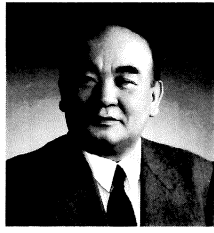
Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
 INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
 ホームページ <http://www.mesh.ne.jp/iush/>

わが大学改革の一側面

早稲田大学

総長 奥島孝康



私は、この四年間、「グローカル・ユニバーシティの実現」というスローガンの下で大学改革に没頭してきた。そこにこめた想いは、教育研究のレベルにおいてはグローバル・スタンダードを実現し、校風はあくまでもローカル性の強いワセダ的泥くささを維持したいという願ひにある。なぜならば、それが先人たちのめざした目標であり、それが本学一七七年の歴史の示す方向であると考えるからにはかならない。

もとより、建学の理念を自らの存在理由とする私立大学であっても、一〇〇年を超える歴史をもつ大学ともなれば、当初の理念も次第に風化し、専任の教職員でさえも大学に託する想いは千差万別となるのはまことにやむをえないことといわねばならない。しかし、そうしたとき、全学の教職員を再結集する求心力となるものは、文章化されていると否とを問わず、建学の理念という私学の「マグナ・カルタ」のほかにはない。早稲田大学には幸いにも、その建学の理念が「教旨」として文章化されている。それを手がかりとしながら、本学の改革の目標をスローガン化すれば、「グローカル・ユニバーシティの実現」ということになると私は考えたのである。その含意は、「シンク・フューチャー、アクト・ナウ」、あるいは、「シンク・グローバル、ゲット・ローカル」であって、さらにいえば、グローバルな視野とローカルな魂とをもった行動力のある若者たちの育成こそが本学のアイデンティティであるという半ば願望をこめたスローガンといつてよい。

グローカル・ユニバーシティの実現のためには、さまざまな方策がありうる。しかし、紙数を考慮して、ここではいわゆる「隠れたカリキュラム」についてだけ述べておこう。それは、早稲田大学における教育の最大の目標である「自恃自信、自反自責、自治自修」（坪内逍遙先生の座右の銘）を実現するための最大の仕掛けだからである。その意味で、学生たちの自主自律を育む教育システム（隠れたカリキュラム）こそが本学のアイデンティティを体現するものでなければならぬと考

えるのである。

第一は、大学の心臓ともいえるべき図書館群の整備・充実である。本学の中央図書館、各キャンパス図書館（四館）、本庄保存図書館、各学部図書室の整備は、かつて私が図書館長であった時代から急速に進行し、残すは巨大な「雑誌センター」のみとなっている。この新設計画が目下の私の課題の一つである。

第二は、博物館の充実である。本学は世界的にも数少ない「演劇博物館」を有するが、昨年、創建七〇周年を機にリニューアルし、また、新たに「会津八一記念博物館」をオープンした。実物教育の大切さからして、今後、博物資料の収蔵庫の新設を考えねばならない。

第三は、全学情報環境のヴァージョン・アップである。この課題は緊急を要すると考え、三カ年計画で取り組んできたが、今年が完成年度に当る。全学生・全教職員に対するアクセス・ポイントの準備がかなりの程度実現へ向っている。学生のための二四時間利用可能な端末室も今後さらに拡大する計画である。

第四は、セミナーハウスの整備拡充である。現在、本学は、軽井沢追分（一七万平米）、菅平（五万四千平米）、松代（七万二千平米）、本庄（七六万平米）等のセミナーハウス用地を所有しているが、今後、軽井沢追分の拡大、鴨川（千葉房総）の新設を中心に、さらに整備充実をはかる計画である。それと同時に、ゼミ等の合宿集中授業の効果を考えると、大学周辺にも一〇〇人程度の合宿が可能なセミナーハウスを新設することも考慮中である。

第五は、二一世紀をにらんだ新学生会館の建設である。本学は小規模な学生会館を二館有するが、老朽化しているうえに、情報化時代に対応できないことから、現在、かなり大規模な新学生会館の建設に着手している。本学の特徴の一つは、二千とも三千ともいわれる学生のクラブ・サークルの数の多さであり、ある意味で、これがわが国の学生文化の発信源の一つとなっているが、その再活

性化のために新学生会館の建設を進めている。二年後の完成の暁には、新しい学生文化の創造の場となることが期待される。

以上のほかにも、スポーツのグラウンドの整備充実とか、学生を含めたベンチャー育成のための「ワセダ・アリー」（早稲田の露地裏道）構想とか、さらには、街と大学が一体化した「ワセダ・カルチエラタン」構想などもある。とりわけ、本学が最近新設した商店街中の「ワセダどらま館」は、かつて「早稲田小劇場」のあったところで、小規模ながら立地条件のよさで、演劇サークルの学生たちから喜ばれている。

いずれにしても、本学の改革は「原点に立ち戻る」ことにすべてを収斂させており、「隠れたカリキュラムの充実」はその作戦の重要な一環であると考えている。

（一九九九年四月一六日）



原・福田の言葉

——原・福田・蛭山委員の

退任を記念して——

(平成11年3月2日)

絹川 本日は長い間大学セミナー・ハウスのFDプログラムにご尽力下さいました三先生が、ご退任なさることを記念いたしました、お集まりいただきました。

そもそも私自身がセミナー・ハウスにこのように深くコミットするようになったきっかけは何だったろうかと思ひ起こすと、あんまりはつきりしないんですね。自然に魅せられて、自然にセミナー・ハウスに居着いてしまった。それだけセミナー・ハウスというものは私たちの思いの中でアットホームというか、我々の問題関心とセミナー・ハウスのあり方が深く関わっていたから自然にコミットするようになったという気がいたします。そういうようなことをきっかけにして、このFDの営みをどのように続けるべきか、今までを振り返ってみて、三人の先生方にお話をいただければありがたいと思います。

福田 私が最初に大学セミナー・ハウスと関係を持ったのは一九八七年の大学教員懇談会です。今だから告白して申しますけれども、それまではFDについてはあんまり頭になかったんですね。これは私にとつては大学教員として大きな体験だったんですけども、テネシー州のローズ大学という小さな大学へまわって、研究をするつもりが、かなり洗脳されて帰ってきました。アメリカの大学で、今で申しますとFDなんですが、それを強力に押しすすめていることを悟りました。授業

のこと、学生のこと、大学のあり方など、根本的にいろいろと考えさせられたのですが、帰ってきて間もなくの大学教員懇談会の夕食の時にその実態を話したんです。それが基になりまして、FDが大学教員懇談会から別れて一九九二年にFDプログラム小委員会ができました。それまであまり存じ上げなかったのですが、示村先生、絹川先生、原先生たち日本にもFDについてベテランの先生がいらして、その素地があったんですね。そういうことで当時委員長だった蛭山先生へ申し入れ、そのことが発火点となり、間もなくFD委員会が分派のような形で発覚いたしました。

私にとつてこのFDはいろいろな意味で勉強の会でした。そのいい点はやっぱり自由に話し合えたということです。委員会でも岡先生や蛭山先生、宮腰先生がどんどん喋られる。それを聞いているだけでも、私にとつては勉強でした。大学間のいろんな情報もそうですが、みんなで育てているということを実感しました。そしてやっとな荷を降ろして皆さんとお別れることになりました。

最近私なりにこんなふうな成果が出てまいりました。それは昨年春から名誉教授になりました。名譽教授というのはこんなにかいのかというのを実感として味わっています。一つは教授会に出なくていい。これはすごいことです。なぜ教授会に出ない方がいいかという、それだけ授業面におつつけられるんですね。実は私どもの東京女子大学を作った新渡戸稲造は講義の前にお祈りをして出ていったそうです。でも私はとてもそんな心境にはなれなかった。最後の方になると、いろんな役割をやらされますから、教授会の始まりぎりぎりまで準備や運営委員会をやらされます。そういうものをやっていたので、かなり大変だったんです。それから解放されて、楽しい授業をやることのできるようになった。「植物と文明」というテーマで30人くらいのク

ラスですが実に楽しいです。授業するのがこんなにも楽しいかということが初めてわかりました。

もう一つはFDに反することかもしれないですが、その授業では世界地図を一枚だけしか持っていない。そして黒板に書くんです。だから私は研修会では、OHPの使い方もも伝授したんですけれども、最後に到達したのは、黒板にゆつくり大きな字で書くこと。そして出席はとらないが常時30人いてもおしゃべりが出てこないんです。実は、少し前に、ある大学病院のお医者さんから私のところに電話がかかってきました。そのお医者さんの患者にうちの大学の学生がいて、私の授業に出ているというのです。その学生が今回のアポイントを取るときに、私の授業のある曜日だけは外すそうです。これを聞きながら感謝の気持ちとともに、非常にうれしく思いました。楽しい授業に学生が敏感に反応してくれているのです。

私自身のFD委員会に残したいことは、あんまり委員にベテランばかり入れないで、女性を加えたり若手も入れるなどしていただければと思います。ある意味で、みんなが苦しみ悩みながらFD委員会が維持されていけるように希望します。FD委員会から実にいろんなことを学びましたけれども、特に私ども自然科学のものは人文・社会の先生方と交わり合えたことが良かったんです。実はFD研修会が終わりました。セミナー・ハウスのある場所内緒の飲み会が度々もたれました。仲良く分野を超えてつき合えるというのは、こういう会合が一番かと思ひます。しかし共通はFDにあるんですね。これからもこのような形で委員の皆さんが自由に話しあって、楽しく続けていっていただければと思います。

原 セミナー・ハウスとの関わりについて申しますと、あれは一九六二年ごろでした。よくか、飯田先生がこの山を買って見ると、当時ICUの学務副学長モーリス・トロローヤ先生のお供をして、まだ木がまばらな山におじゃまをしたのが最初です。飯田先生は東京女子大からICUに移られて就職部長をしながら、先生の言葉を借りれば、「ICUは少数の学生にだけ広大なキャンパスの自然を楽しませてくれるけれども、他の大学ではそういう機会のない学生諸君がたくさんいるから、自分はここで、どこの大学の学生でも迎え入れてICUらしい雰囲気を提供したいのだ」と言っておられました。ICUにいた当時の私としては、セミナー・ハウスはキャンパスの延長であり、学内に他大学の先生や学生諸君をお招きする機会には非常に限られているけれども、八王子のセミナー・ハウスに行けば本当にそういうことができるだろうということ、それ以来のお付き合いです。ですから今の本館ができたときも、若者の魂にくさびを打ち込むのだということ、出会う学生諸君や先生方とも、そのつもりでここでいっしょにやりますよ、また、ああいう坂道を登ることも深い意味合いが込められているということをよくお話ししました。その当時は食事の時に必ず大学間でエールの交換があり、お互いにご挨拶や校歌を歌ったりしながら、他の大学の先生方や学生諸君と本当に出会うという体験をさせていただきました。エンカウンター、出会いという言葉は本来、神と人間とが出会うという意味なんです。我々はお互いにとこまで裸になつて話し合い、心を通じ合えるか、という意味での出合いの場として、私にとつてはかけがいのない場所のように思っていました。

そしてIDEの集まりの帰り道に井の頭線の中で、飯田先生の娘さんとお話ししました。たしかパーキンスが来たときではなかったかと思うのですが、彼はfrom autonomy to freedomという言い方をしたのです。大学各自が自律性ということだけを主張していたので

はこれからの高等教育は成り立たない。高等教育というシステムの中で、それぞれの大学が独自性を生かしながら、お互いに協力し合わなければ、研究にしても教育にしても社会奉仕にしてもできないではないかというのが彼の主張だったと思います。その話を聞いた帰り道に、どうやって教育面でも大学間のネットワークを具体的に実現させることができたらどうかということをお話ししました。私も私立大学連盟でそういう研修・企画委員をしていたものですから、私立大学連盟としてひとつ頑張ってみる。しかしセミナー・ハウスはさらに国立・公立・私立の垣根を超えてその役割を担っている筈だと、そんなお話



正面左より福田氏、原氏、蛭山氏。手前は緋川氏。

をしたのです。それが後日、セミナー・ハウスの理事会を通して今の私たちの研修プログラムに実ったのではないだろうかと思いません。

この間、四国大学で大学教育学会の課題研究集会がございました。その学会で、北海道大学の坂井先生と現委員の山内先生のお二人に発題をお願いしたのです。坂井先生の主張は、FDが言い出された頃と、10年近くたっている今日とはFDの意味合いが違ってきているのではないかと。果してそれを踏まえて研修プログラムを考えているのかどうかという問題提起をなさいました。それから山内先生は、カリキュラム論と授業論とが乖離しているという問題提起をなされて、そこに集まっていた人々に非常に強いインパクトを与えられたのです。私は、FDというプログラムの中には大学行政の問題から学生指導、社会奉仕までいろんな側面があり、私なりにまとめると12の領域があるということとその場でお話させていただいて、ファカルティーとはなんぞや、個人としての大学教員としての資質であると同時に、教授団としての役割というものを踏まえた上で、それらの開発と向上を具体化させるためにFD活動をどう展開したらいいのか、これからのあり方をみんな考えてみましょうという話をさせていただきました。

ですから先生方には、FDプログラムのカリキュラム論と授業論とを乖離させないようお願いしたい。これからこの研修プログラムを続けていくために、いったいどういう枠組みを持ってプログラムを作り、それにふさわしいテーマを選び、それに貢献して下さる講師をお招きするか。カリキュラムはたえず手直していかなければならないように、このプログラムも手直しをしなければいけない。私たちの研修プログラムがいったいどういう枠組みをもって実施されているかということ

を、委員の先生方は当然のことながら、そこに参加される方たちにもよく理解していただく必要がある。また今のように講師をお招きして、分科会で話し合うやり方も非常に大切ですが、それ以外にもいろいろの方法を検討していただきたい。

以前、示村先生と蛭山先生がビデオに映って下さり、それを討議のたたき台にしたことがありました。ところが皆さんはご遠慮なさって、全然批判めいた発言がなかった。早稲田や上智のような優れた学生さんのところで、そういう優れた授業が成り立つということの一つのモデルにしながら、では自分にとってはどうか、そのままいいのか、どこをどう手直ししなければいけないのか。そういう教材がありながら、それを利用し損なったということがありました。それからこれは参加者と我々ファシリテータの数の問題だと思っておりますけれど、本当の意味でのワークショップになっていない。各自が自分の経験をまな板にのせて、皆さんに料理してもらおうという雰囲気作りはまだ私たちが上手に引張っていただけなかった。いきなりそうしろといっても無理なことですから、参加者には事前のオリエンテーションが必要なのです。また、せっかく作ったハンドブックが十分活かされていない。事前に勉強してもらって、それを読んでもこなすのはデイスカッションに参加できない、くらしいやり方をしていた良かったかと思えます。アンケート調査をしても、セミナーは決して時間の無駄ではなかったと誉めて帰られる方が多いのですけれども、しかし本当にそれを顔面通りに受けとっているのか。まだまだ厳しい意見が隠れてはいないか。そういったフォロワーをいかにいかにいかに。いったい二日間であれだけ意見が変わったのか。そして自分の大学に持ち帰って、それをどう活かしたか。あるいはそれによって大学に少しでも波紋がおきたのか、

おきなかったのか。それらを聞き出さないと、私たちがここでやっていることの本当の評価をしていただくことにはならないのではないかと。私たちは一生懸命やっているつもりなのですけれども、時代の変化、学生の質の変化、社会が要請している大学の役割の変化というものに適切に対応していくためには、そのフォロワーをこれからも一層しっかりやっていただけたいと思います。

私は今、亜細亜大学で教職課程を担当しています。そこでは野球部の選手たちも受講しているのですが、今年も全国一になったものですから、授業にはほとんど出てこない。シーズン中ということでも前期も後期も最後の2、3週しか出てこない。そのために特別の補講もできないから、私の授業はすべてビデオに託しておくので、欠席したところは自分たちで見、質問をオフィスアワーで受け分たことになってあります。そのような理由から私の授業のビデオは山ほどあります。授業中に居眠りをしていけばその学生のところに行って、耳元でパチンと手をたたいたりしているところも写っております。どういふタイプの学生にどういふふうなアプローチをしているかがお分かりいただけるでしょう。そして評判は決して良くない。私の授業評価というものはものすごいコメントがついてきますが、それは覚悟の上で、全て確信犯でやっているわけです。ですから、皆さんにも是非ご自分の授業をビデオに撮ることをお勧めします。

蛭山 緋川先生のお話のように、なぜ大学セミナー・ハウスに居着いちゃったのかということも私にもわからないですね。教員懇談会もFD委員会もそうですけれども、普通は大学から行ってこいと言われてくるか、自分が是非行きたいと思ってくるかどっちかなんです。私は大学から行ってこいと言われたこと

はなかった。でも自分がなぜ来たのかなと考
えてもわからないんです。ただ、教員懇談会
の前の委員長が私の高等学校時代の同級生の
井早康正さん（元電気通信大学教授）だった
んで、彼に口説かれて、委員長を引き受けた
んですね。ということは、その前から教員懇
談会に出席していたわけですが、その動機が
何だったかわからない。でもなぜ居着いたか
という問題に関しては、FD委員会の場合は
特に、メンバーの皆さんに嫌な人がいない。
みんな親しく話ができ、勝手なことが言える。
そういう雰囲気の良いことがあったと思うん
です。これが多分大切なことだと思います。

「FD委員会を始めたキッカケは、
『大学力を創る…FDハンドブック』の「あと
がき」にも書いたことなんですが、教育の専
門家の話を教員懇談会で聞いて、内容が何で
こんなに面白くないんだろう、役に立たない
じゃないか、ということだったんです。不
遜ですけれど、それが出発点だから、われわ
れの活動も、「役に立たないじゃないか、面白
くないじゃないか」と言われないうちに常に
現場の先生たちの意見をフィードバックする
ことが重要だと思っんです。そういう意味で
も僕は定年退職すれば当然現場から離れるか
ら辞めていく。名残惜しいけれど、これは当
然のことだと思っんです。FDに関わって約10
年になりますけれども、楽しく過ごさせてい
ただいたし、お陰様で私の授業も終わりの方
が確かに良くなっていると思っんです。セミナ
ー・ハウスでは是非このままFDプログラムを
続けていってほしいと思っんです。

原先生の話を知って、なるほどと思っ
たことがあるんです。それは、私が前委員長
の示村先生と二人で、まな板の鯉になったつ
もりで自分の授業をビデオにとってもらい、
それを材料にしてFD研修会の分科会でのデ
ィスカッションをしたことがありました。し
かし議論は非常に低調で失望したんです。本

当はもつと手厳しい批判があつてよかつた
と思つたんですけれども。しかし、それは一
には責められないのかも知れません。とい
うのは、何時だったかゼミで学生たちに「質
問せよ」としつこく言うのと、そういう訓練を受
けてないんだという答が返つてきました。確
かにその通りで、小学校・中学校・高等学
校に進むにつれてディスカッションする機会が
減り、能力が落ちてくる。先生方も実は学
生たちと同じではなからうか。先生方もそのよ
うな世代に入つてきているから、質問したく
てもできないということがあるんじゃないだ
ろうか。そのことをまず認めてかかるべきじ
やないかなと思っんです。

授業に關しても一つ。私が若いときは、
この程度のこと知らない奴は俺の授業を聞い
たつてわからない。そういう学生は相手にし
ないという傲岸な態度で講義していたん
です。けれども、ちょうどその頃、国際関係の分野
で学会の理事長もなさつた私より3年先輩の
川田侃さんの授業を聞きにいったんです。そ
うしたらゆつくり喋るんですよ。なるほど、
やっぱりこれが必要なんだと感じました。

今日朝刊を見ていたら、高等学校の授業で
新たに選択科目を増やしている。選択の幅を
広げるといふのは結構なんです。しかし本
当にそれでいいのかなと思っんです。わかり
にくいから、わからなくても単位をとれるよ
うにしてやるというだけの話ではないだろ
うか。私は旧制高校時代は理科におりましたか
ら、数学でもなんでもやらなくちゃいけなく
て成績は悪かつたんです。けれども覚えてい
るのは、高等数学の先生が黒板に微積分の数
式を書かれて、「きれいだろ、美しいだろ」と
言う。つまりそれはバターンの美しさなん
です。それがわかるまでにはかなり勉強しな
ければならない。それがわかれば突破口が開
かれるんだろうと思っんですが、絹川先生は
そうではないと思っんですが、数学者は、その

ことにたぶん気がついておられない。自分
が美しいと思つて、それを学生にわからせ
る努力をせずに授業をしてしまふ。学生にと
つてはいい迷惑なんじゃないかと思っんです。
わからせる努力をするほうが選択科目を増
やしてごまかすよりもっと重要ではないかな
という気がするんです。私のまわりの同僚を見
回しても、人気のない授業をする人はおりま
すが、その人の話はわかりにくい。わからせ
る努力というのはどういうことか。それは面
白い話や笑い話をするのではないと思っ
んです。それは論理的に一貫性があるとい
うことと、説明するのにわかりやすい言葉を使
うということが本質なんじゃないかと思っ
んです。わたしたちは早口では喋れないのでゆつ
り喋るんですけれども、学生に話を聞いてみ
ると、先生の話は分かりやすいといつてくれ
るので、良かったなと思っんです。だからこ
そ、私語がないかあるかという問題は、学生
の質の問題であると同時に教師の質の問題で
もあると思っんです。研究者として優れて
いるかもしれないけれども、それを表現する
能力がないのは、やはり教師としては問題が
あるわけなんです。

今年の最後の試験の時に、この授業を聞
いて自分の生涯に何か役に立つたと思つたかど
うか、思わないならどういふところが思わな
いかというエッセイを書いてもらつたんです。
私の授業は前期が「国際政治学」、後期は「戦
争と平和の諸問題」というテーマの専門科目
なんです。私としてはそれを専門科目では
なくて一般教養科目として位置づけていて全
学部学生に開放しています。そうしたら、そ
の中である学部の学生が、先生の授業にで
てみたら学生がみんな真剣に聞いていたの
にと驚いたといふんです。彼の所属する学
科ではみんなヒソヒソ喋っているんで、一
生懸命に聞いていたのにはびっくりしたとい
ふんです。それだけの努力はしたつもりなん

ですが、学生がわかつてくれたということは非
常にうれしかった。もちろん内容的に弱点や
足りないところの多い講義であることはよく
わかつているんですけれども、29年間の教師
生活の最後の授業の結果がそういうことだ
たので非常に満足しています。FDをやつた
おかげで、ちゃんとシラバスを作り、授業日
程をきちんと書いて、それが実現しないと補
講をする。今年は補講だけはしないで終わら
せようと思つて、当然それをシラバスの中に
宣言しました。だから「先生は最終講義はい
つやるんですか」と聞かれても、「とんでもな
い。最終講義なんてやつて余裕はない。き
ちんと終わらせられるまで一杯なんだ」と
いうことで、それは非常に紋切り型かもしれ
ないけれども、自分で作つて配布したシラバ
スに対しては忠実にやつたと思つているん
です。FDのお陰です。

絹川 練達の士のお言葉をいただきました。ま
どうやつて総括するか問題ですけれども、一
言で言うと原点です。原点に戻ると同時に、
（原先生のお話に出てきた）坂井先生が言われ
たようにFDの意味が変わつてきた。そこを
踏まえて私どものこのプログラムをどう発展
させるか、一つの時が来ている感じがいたし
ます。時代は刻々と変わつて、学生も変
わつていくわけでありまして、私どもだけ
変わらないうわけにはいかないわけですが、
変わることは難しい。一方では変わつては
ないという話もありましたが、変わつてはな
らないといふことと変わるべきことのハーモ
ニーを私たちがどのように美しく作り出すか、
新しい課題を与えられた思いが致しました。
先生方には長い間ご指導いただきました。本
当にありがとうございます。
（平成11年3月2日。原・福田・蟬山委員ご退
任送別会より抜粋）

よりよい大学教育の方法を求めて 学びがいのある カリキュラム 教えがいのある カリキュラム

第17回大学教員研修プログラム
99年1月23日～24日

▼講演
カリキュラム改革という課題

—その理念・条件・運動を考える—
桜美林大学大学教育研究所長

寺崎 昌男

▼提題

1. 「とりあえず学生をいかにして国際的に通用するエンジニア」に育てるか

— A Radical Education Reform at the Kanazawa Institute of Technology : Lessons Learned

金沢工業大学工学部教授 札野 順

2. 非専門性をいかに教養教育にとり入れるか— 広島大学のパッケージ別科目の試み—

広島大学総合科学部助教

品川 哲彦

3. カリキュラムの制度論
筑波大学大学研究センター助教

清水 一彦

4. カリキュラムの改善とFD
—私の失敗を省みて—

重細重大学教務委員長 原 一雄

【参加状況】55校83名(男77名・女6名)
東海(6)、国際基督教・日本(4)、富山・香川医科(3)、金沢・琉球・聖徳・桜美林・明星・敬和学園・名古屋外国語・大阪商船・神戸商船・広島・山口・九州・佐賀医科・長崎・岐阜薬科・大阪市立・大阪府立看護科学・宮崎公立・北星学園・北海道医療・東北工業・大妻女子・工学院・順天堂・成蹊・清泉女子・大東文化・東京工科・武蔵工業・桐蔭横浜・フェリス女学院・新潟経営・新潟産業・静岡理工科・関西・近畿・岡山理科・筑紫女学園・福岡工業・熊本学園・目白(1)、防衛大学校(3)

◆ 大学設置基準の大綱化が謳われてから8年が経過しようとしている。「シラバス」「自己点検・自己評価」なども耳新しい言葉ではなくなり、改革の波もようやく全国に浸透してきたかに見える。そして昨秋、21世紀の日本の大学像を提示し、いつそこの大学改革を進めるための答申が大学審議会から出された。しかし、大学改革が掛け声通り浸透していないことは、当の大学関係者が最も強く感じているところである。今回のプログラムはそのような状況の中、初心に戻り、教員にとって「教えがいのあるカリキュラム」であるはずの、学生にとっての「学びがいのあるカリキュラム」を模索しようと企画された。

全国の国・公・私立の大学関係者の参加によるプログラムは、先ず桜美林大学の寺崎氏による講演で始まった。氏は、これまでの大学のカリキュラム改革を概観され、今後のカリキュラム改革を含めた大学改革の目標を提示された。

その後カリキュラムをめぐる様々な切り口から4人の提題者による講義と質疑応答が行なわれた。札野氏は金沢工業大学におけるエ

ンジニア養成のためのカリキュラムの紹介、品川氏は広島大学におけるパッケージ別科目としての教養教育の紹介、清水氏は日本におけるカリキュラム改革の歴史、原氏はご自身のカリキュラム改革の体験をそれぞれ紹介された。

◆ 夕食後は提題者毎の分科会に分かれ、各セミナー室での討論会が行なわれ、翌朝は分科会の後、全体会で分科会報告と質疑応答が行なわれた。

最後に委員長長の絹川氏による総括が発表され、熱気に満ちた2日間に互るプログラムの幕が閉じられた。

◆ 大学がFD活動を本格的に具体化していかねばならないこの時期、講師と83名の参加者による緊密な情報交換と、活動への意欲を新たにすることができたことは、参加者にとって大きな収穫だったのではないだろうか。(第16回と第17回をまとめた記録書は現在制作中です)

日本の金融危機 アジアの金融危機

第2回土曜セミナー

99年1月30日

【講師】

1. 日本の金融システム危機
東京大学大学院経済学研究科教授

伊藤 正直

2. アジア通貨危機の教訓から
東京大学大学院経済学研究科助教

福田 慎一

◆ 【参加状況】32名(学生19名・社会人13名)
青山学院・明治学院(3)、東京・文教・専修(2)、千葉・東京理科・法政・関東学院(1)、大学名不明(3)、社会人(13)

◆ バブル崩壊後、日本の金融システムは現在にいたるまで、安定を取り戻していない。銀行・証券会社の破綻は、日本の金融危機がシステム全体の深部にまで及んでいることを如実に示した。金融再生・景気回復のための財政資金投入が確定したにもかかわらず、銀行の国有化が実施されるなど、金融機関をめぐる激動はおさまっていない。さらに、生保や証券における外資との提携や外資の進出も近年著しく、今後どのような金融再編成が起こるもおおしくない状況が続いている。

◆ また、これまでかなり長期にわたって高い成長を維持してきたアジア諸国にも、金融危機の波が押し寄せている。タイ・バットの暴落に連動し、インドネシア・ルピア、マレーシア・リンギット、韓国・ウォンなど、通貨の一斉の暴落が進行した。これら諸国の為替レートは安定せず、金融機関の経営危機など国内金融システムに危機は広がった。このためIMFは、韓国、インドネシア、タイに緊急融資を実施し、被融資国の経済構造・財政金融政策の「改革」を迫った。アジア金融危機は、ロシア、東欧諸国に波及し、さらに現在では中南米諸国へも広がる勢いをみせている。

◆ セミナーでは、このような金融の危機的状況をふまえて、まず伊藤正直氏は、金融システム危機とは、システムの構成要素である金融機関の破綻ないし財務悪化などにより、円滑な資金循環が阻害され、システムの再編なしにはその回復が困難な状況であると説明された。さらに、日本の金融危機をめぐる論点、

社会学入門 みえざる 社会問題に どう迫るか

危機の背景、危機への対応、恐慌・不況の対策などについての説明もされた。つづいて福田慎一氏は、アジア通貨危機の原因を考察し、その教訓として東アジア地域における今後の通貨・金融システムの望ましいあり方を検討するというテーマで講義をされた。このなかでは、各国の通貨危機の現状、危機は起るべくして起こったのか、アジア通貨危機の特徴、今回の危機に対するいくつかの仮説、IMFの支援、東アジア地域における今後の通貨・金融システムの望ましいあり方と日本の役割などについての説明がなされた。

日帰り「土曜セミナー」の第2回はテーマが身近な金融危機であったということや、地元にも広報したこともあり、社会人の参加が目立った。両氏の講義終了後、一時間に及ぶ活発な質疑応答が行なわれて、終了時刻を迎えた。

今年度から新たに企画された土曜セミナーを、さらに多くの方々にご参加いただき満足いただけるものにするため、参加者からのアンケートも参考にしつつ、次年度に向けて新たなプログラムを検討したい。

▼特別講義 文化と不平等

立教大学社会学部教授 宮島 喬

▼セクション演習

A. みえざる環境問題と環境リスク
東北大学文学部教授 長谷川公一

B. 世代間階層移動と結果の不平等
北海道大学文学部助教 鹿又 伸夫

C. みえざる社会問題／見たくない社会問題としての性差別
甲南女子大学文学部助教 牟田 和恵

D. 労働市場の中心と周辺
法政大学社会学部教授 上林千恵子

E. 社会理論への今日的要請
武蔵大学社会学部教授 西原 和久

【参加状況】 56名男37名・女19名

早稲田(12)、立教(7)、慶應義塾(5)、国際基督教(3)、都留文科・青山学院・中央・東海(2)、東北・東京・お茶の水女子・文教・杏林・聖心女子・東京薬科・東邦・日本・日本女子・法政・武蔵・明治・東洋英和女学院・フェリス女学院(1)、その他(6)

「社会学とは何か、どう学べばよいか、戸惑いの声を聞く。学び方は様々でよいが、何が現代社会の抱える重要な問題であるか、をまず諸君なりにつかんでほしい。脱工業社会への途上にある私たちの社会では貧困、無知、不衛生、自由の抑圧は主要な問題でなくなつたようにみえる。では何が問題なのか。それが見えにくくなっているのが現状だ。

本セミナーは、参加者諸君になるべく具体的に社会的現象を呈示し、見えにくいといわれる社会問題の文化的な背景と客観的構造を共に考えることをめざしたい。また、これらの問題を社会学のアプローチによって説明するとはどんな作業なのか、を講師と共に学ん

でほしい。旺盛な現実関心と澁刺とした思考によってチャレンジしてほしい社会学への道。それに向けての入門セミナーなのである。」

このような募集要項の呼びかけに、23校から56名の参加者がセミナー・ハウスに参集した。1年生から大学院生や社会人まで、社会学の知識もバックグラウンドもさまざまな人達が集まってセミナーはスタートした。

プログラム初日は、参加者が一堂に会した共通セッションから始められた。共通セッションでは、まず分科会を担当する講師がテーマやアプローチの方法などについて話された。そこでの話をもとに参加者は自分の所属する分科会を選び、夕食をはさんで活発な議論が展開された。

二日目の午前中は「現代社会と平等・不平等」をテーマにシンポジウムが行なわれた。シンポジウムは、鹿又氏の基調報告から始められた。氏は現代社会の結果の不平等は資産格差であるとされた上で、資産格差をもたらすものは所得と相続贈与であり、それらを規定している社会的要因についてデータを基に分析され、日本における機会の不平等と結果の不平等がどのように結びついているのかについて報告された。この問題提起を受けて経済学、ジェンダー、労働問題にまで話が及び、データを使った方法論についても幅広く議論が繰りひろげられた。

次に宮島氏が「文化と不平等」をテーマに特別講義をされた。氏はエスニシティ、マイノリティの問題などの具体例を挙げながら文化とは何かを解題され、常に社会問題の文化的前提を問う視点を持つことが重要であると述べられた。

昼食をはさんで午後には「環境と新しいライフスタイル」をテーマにシンポジウムが行なわれた。ここでは長谷川氏がグリーン電力について基調報告をされた。氏は原子力発電所の危険性を指摘し、どのような電源を選択

するかは社会の意志の問題であり、市民自らが現状を変える運動をすることが重要であると指摘された。これを受けて、日本の原子力政策や市民運動にまで意見交換がなされた。夕食後の懇親会ではアットホームな雰囲気参加者同士の交流が行なわれた。

最終日の総括討論は、各分科会がレジュメを作って報告し、活発な質疑応答がなされた。天気にも恵まれ春の温かな日差しの中、充実したセミナーが幕を閉じた。



第179回大学共同セミナー講師、参加者(3月12～14日)——ようこそ広場にて

平成10年度 教育プログラム白書

平成10年度は表1の通り、大学共同セミナー3回、大学院共同セミナー1回、土曜セミナー2回、大学教員懇談会1回、大学教員研修プログラム2回、国際学生セミナー1回の計10回を実施した。

表2は、主に学生を対象とするプログラム（大学共同セミナー・大学院共同セミナー・国際学生セミナー）と、社会人および学生を

対象とするプログラム（土曜セミナー）の計7回の大学別参加状況表である。参加者総数は61校（昨年62校）・37名（同35名）で、1回あたりの平均参加者は54名となった。初の試みとしての日帰りの土曜セミナーは、初年度とあって第1回の参加者は少なかったものの、2回目は参加者が増えており、知名度を上げることによる今後の伸びが期待できる。2年ぶりに開催した大学院共同セミナーは、多数の大学院生が応募し、大学院生向けのセミナーのニーズも高いことを示している。

教職員を対象とする大学教員懇談会と大学教員研修プログラムは計3回開催し、国公私立の壁を越えて22名（昨年20名）の参加を得た。昨今の大学問題に関して意見交換が行なわれた。今回から大学教員懇談会の募集を全国に広げたことと、学会シーズンをはずして開催時期を秋から夏に変更したことで、多数の教職員が集まり、熱気あふれる懇談会となった。また、1月に行なった大学教員研修プログラム「学びがいのあるカリキュラム・教

はるかに越える申込が殺到し、各大学のカリキュラム改革への意識の高さがうかがえた。セミナーでは、大学や世代を越えて、カリキュラム改革についての積極的な意見交換が行なわれた。

最後に、各セミナーで講師を務められた諸先生方、プログラムの企画・運営にあたられた共同セミナー委員会、大学教員懇談会企画委員会、国際プログラム委員会、大学教員研修プログラム委員会の各委員、そしてセミナーに参加された方々に改めて感謝の意を表したい。

表1 平成10年度教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー					
回数	期間	主 題	講 師	参加人数	
177	1998年 10月9日～11日 (2泊3日)	地球市民になろうpart2—戦争と平和について考える—	小島清文、ダグラス・ラミス、佐伯奈津子、大西 仁、白井久和、内海愛子、伊東孝之、杉田明宏	68名 (17校)	
178	12月5日～6日 (1泊2日)	科学と社会、そして技術—環境・生命・物質—	今堀和友、大橋裕二、中島秀人、市村禎二郎、村上陽一郎	37名 (15校)	
179	1998年 3月12日～14日 (2泊3日)	社会学入門／みえざる社会問題にどう迫るか	宮島 喬、長谷川公一、鹿又伸夫、牟田和恵、上林千恵子、西原和久	56名 (23校)	
■大学院共同セミナー					
16	1999年 10月23日～25日 (2泊3日)	カルチュラル・スタディーズ	小森陽一、本橋哲也、吉見俊哉、千野香織、成田龍一	64名 (25校)	
■土曜セミナー					
1	1998年 12月19日	新しい映画史を考える—知られざるムルナウ	小松 弘	23名 (7校)	
2	1999年 1月30日	日本の金融危機・アジアの金融危機	伊藤正直、福田慎一	32名 (9校)	
■大学教員懇談会					
35	1998年 7月4日～5日 (1泊2日)	混迷する社会の中の教育と大学—大学の役割—	山住正己、下村哲夫、大磯正美、岡昌之、山岸駿介	75名 (53校)	
■大学教員研修プログラム					
16	1998年 9月19日～20日 (1泊2日)	教える授業から学ぶ授業へ—その2—	宮本美沙子、山内惟介、小林志郎、田中每実、嶺山道雄	63名 (40校)	
17	1999年 1月23日～24日 (1泊2日)	学びがいのあるカリキュラム・教えがいのあるカリキュラム	寺崎昌男、札野 順、品川哲彦、清水一彦、原 一雄	83名 (55校)	
■国際学生セミナー					
25	1998年 11月20日～22日 (2泊3日)	アジアの危機とその衝撃—われわれはいかに対処すべきか—	川勝平太、関場誓子、須田明夫、勝俣 誠、北沢洋子、滝田賢治、天児 慧、宇佐美滋、友田 錫、大芝 亮、首藤もと子	114名 (26校)	

表2 平成10年度教育プログラム参加状況

学校名	男			女			計	学校名	男			女			計
	男	女	計	男	女	計			男	女	計	男	女	計	
東北	21		8	29	聖心女子			14	14						
茨城	2			2	高千穂商科			1	1						
筑波	3		2	5	拓殖			1	1						
埼玉	1		1	2	多摩美術	1		1	1						
千葉	2		3	5	中央	16		16	16					32	
お茶の水女子			2	2	津田塾			1	1					1	
東京	11		9	20	帝京	1		1	1					1	
東京外国語			3	3	東海	2		2	2					2	
東京芸術	1		1	2	東京工科	1		1	1					1	
東京工業	5		1	6	東京薬科	6		3	9					9	
一橋	6		4	10	東京理科	1		1	2					2	
横浜国立	1		1	2	東邦	1		1	1					1	
名古屋	1		1	2	日本	7		6	13					6	
大阪	1		1	2	日本女子			6	6					6	
神戸	2		1	3	武蔵	2		2	2					2	
国立小計 (17校)	57		34	91	法政	7		1	8					8	
都留文科			1	1	明治	1		3	4					4	
静岡国立	2		2	4	明治学院	4		5	9					9	
公立小計 (2校)	2		1	3	立教	2		12	14					14	
八戸	1		1	2	早稲田	17		16	33					33	
文教	3		2	5	東洋英和女学院	1		1	1					1	
青山学院	6		1	7	立正	1		1	1					1	
亜細亜	1		1	2	和光	1		1	1					1	
大妻女子	1		1	2	関東学院	1		1	1					1	
桜美林	2		4	6	フェリス女学院			2	2					2	
学習院	1		3	4	立命館	1		1	1					1	
國學院			2	2	関西	1		1	1					1	
杏林	1		2	3	私立小計 (42校)	111		123	234					234	
慶應義塾	12		10	22	ハーバード			1	1					1	
恵泉女学園			1	1	放送	2		2	2					2	
国際基督教	3		5	8	その他小計 (2校)	2		1	3					3	
上智	1		2	3	社会人	31		12	43					43	
成蹊	2		2	4	大学名不明	3		3	3					3	
大東文化	3		2	5	総合計 (61校)	206		171	377					377	

注) 計7回(第177回～179回大学共同セミナー、第16回大学院共同セミナー、第25回国際学生セミナー、第1回～2回土曜セミナー)
注) 総計377名のうち留学生は21名

平成10年度 業務白書

●年間の宿泊利用者三万八、二二三三人

平成十年度の宿泊利用者数は延べ三万八、二二三三人（月平均三、一八六八）、グループ数は六九六（同五八）であった（表1）。対前年比は二、三六二人減で、とりわけ会員校と学術・教育団体の減少が目立った。一方、前年度に引き続き受け入れたマレーシア政

表1 利用者別状況表

() 内は前年度

利用者	人数	グループ数	比率 (%)	宿泊実人数	比率 (%)	宿泊延人数	比率 (%)	1団体平均人数
会員校	400(427)		57.5	12,744(13,821)	56.5	18,685(20,383)	48.9	32(32)
非会員校	102(109)		14.5	3,951(4,298)	17.5	9,081(8,814)	23.8	39(39)
大学連合	47(39)		6.8	1,825(1,715)	8.1	3,375(2,904)	8.8	39(44)
学術教育団体	86(124)		12.4	2,740(3,499)	12.2	4,613(5,697)	12.1	32(28)
企業社会人	61(67)		8.8	1,291(1,609)	5.7	2,479(2,797)	6.4	21(24)
合計	696(766)		100	22,551(24,942)	100	38,233(40,595)	100	33(33)

図1 利用グループ構成比

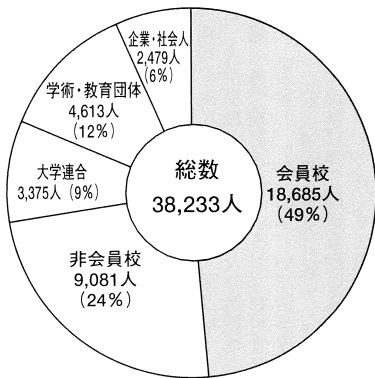
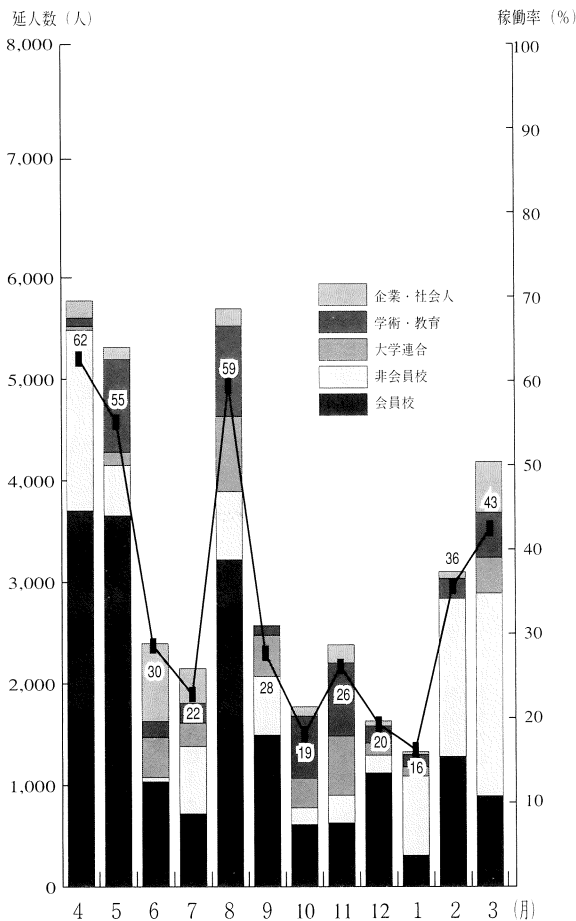


表2 協力会員校最多利用上位校

大学名	グループ数	大学名	宿泊延人数
中央大学	49	中央大学	2,899
早稲田大学	22	明星大学	977
東京学芸大学	19	東京工科大学	849
立教大学	18	早稲田大学	828
明治大学	17	明治大学	740
東京都立大学	16	大妻女子大学	602
日本大学	16	東京都立短期大学	565
東京大学	13	東京学芸大学	551
明治学院大学	12	日本女子大学	532
駒澤大学	12	東京薬科大学	522
桜美林大学	12	東京都立大学	483

府派遣留学生40名の3カ月にわたる長期滞在は延べ三、二〇七人であった。なお、開館から本年度末まで（33年9カ月間）の宿泊利用者数は延べ一五九万三、〇五六八、グループ数は三万二、二九五に達した。

図2 月別・利用者別宿泊延人数と稼働率



●グループ別の利用状況
宿泊延べ人数全体に占めるグループ別の構成比は図1に示す通りである。「会員校」（本年度末現在六五校）の利用は一万八、六八五人で、構成比は四九％（前年度五〇％）であった。「大学連合」には当ハウス主催の各種プログラムをはじめ会員校の教師・学生が多数参加する集會が含まれているので、「会員校」の利用率は実質的にはこれより高い。「非会員校」を加えると大学関係の利用の構成比は計八二％となるが、一方、「学術・教育団体」にも大学関係者が相当数含まれている。

●年間の稼働率は三五％
本年度の当ハウスの稼働日数は、年末年始の休館8泊分と6月の施設整備期間4泊分を差し引いた三五三日で、宿舎（収容定員三三〇人）の年間平均稼働率は三五％（前年度三七・一％）であった。図2に月別・利用者別の利用状況と稼働率を示したが、平均を下回る月は、例年同様、年度の後半、秋から冬に多くなっている。

大学関係の利用の主流は、いわゆるゼミ合宿、次にサークル等課外活動の合宿であり、宿泊数では一泊が圧倒的に多い。また、春から夏にかけて、例年、新入学生の合宿研修（オリエンテーション）が繰り返される。

が、クラス単位以上の合宿は計五三グループ（三三校）、延べ八、〇〇〇人を数えた。なお、ご参考までに、本年度最多利用の会員校上位校を表2で紹介した。グループ数・宿泊延べ人数とも中央大学が平成元年度以来10年間連続で一位を維持したことになる。「学術・教育団体」と「企業・社会人団体」の構成比は双方で計一八％（前年度二一％）であった。

平成10年度
第3回常務理事会

99年3月11日/モノリス29

【出席者(順不同)】(常務理事)三宅彰、宇野重昭、絹川正吉、(法人)佐野博敏理事長、本江哲郎専務理事
●主な議題
大学職員研修プログラム委員会、特別委員会等、他。

平成10年度
第4回常務理事会

99年3月31日/アルカディア市ヶ谷

【出席者(順不同)】(常務理事)小山宙丸(法人)佐野博敏理事長、本江哲郎専務理事
●主な議題
平成10年度第3回常務理事会の報告、第94回理事会・第74回評議員会の議案の確認、他。

平成10年度
第94回理事会・第74回評議員会

99年3月31日/アルカディア市ヶ谷

【出席者(順不同)】(理事)佐野博敏、天城勲、小山宙丸、本江哲郎(監事)梶井功(評議員)川原栄峰、井早康正、佐藤保、磯野可一、宮本美沙子、國岡昭夫、柳井道夫、志村尚子、石井哲夫代理
【委任状による者】理事11名、評議員54名
佐野理事長が議長となり、各議案について逐次提案説明があり、それぞれ質疑応答・審議の結果、いずれも原案通り承認された。
▽平成10年度予算の補正について
平成10年度補正予算(案)として、特定預金支出科目の減価償却積立金支出として二千五百万円の計上が認められた。
▽協力会員校の加入・退会について
「協力会員校の加入」恵泉女学園大学、「協力会員校の退会」成城大学、「準協力会員校の退会」東京都立医療技術短期大学、恵泉女学園短期大学。
▽評議員人事について
協力会員校の学長交替に伴う一橋大学長石弘光氏の評議員新任と同大学前学長阿部謙也氏の評議員退任。
▽役員人事について
協力会員校の学長交替に伴う一橋大学長石弘光氏の理事新任と同大学前学長阿部謙也氏の理事退任。
▽平成11年度事業計画(案)・収支予算(案)につ

平成11年度一般会計収支予算書

(平成11年4月1日～平成12年3月31日) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	8,300	〈管理費〉	87,230,000
会員校会費収入	62,450,000	人件費	48,060,000
事業収入	129,930,000	施設管理費	31,490,000
施設改修協力金収入	6,360,000	一般管理費	7,680,000
セミナー会費収入	9,030,000	〈事業費〉	135,480,000
補助金等収入	5,142,000	人件費	55,550,000
寄付金収入	150,000	一般事業費	59,360,000
雑収入	5,179,700	普通セミナー事業費	11,730,000
繰入金収入	8,000,000	学生指導セミナー事業費	5,710,000
		国際学生セミナー事業費	3,130,000
		〈固定資産取得費〉	2,600,000
		〈減価償却積立預金支出〉	25,000,000
		〈予備費〉	940,000
当期収入合計(A)	226,250,000	当期支出合計(C)	251,250,000
前期繰越収支差額	70,000,000	当期収支差額(A)-(C)	-25,000,000
収入合計(B)	296,250,000	次期繰越収支差額(B)-(C)	45,000,000

(注) 消費税の処理は税抜き方式によっている。

平成11年度特別会計(千人会)会計収支予算書

(平成11年4月1日～平成12年3月31日) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費収入	2,540,000	通信運搬費	140,000
雑収入	60,000	払込手数料	30,000
		繰入金支出	8,000,000
		予備費	30,000
当期収入合計(A)	2,600,000	当期支出合計(C)	8,200,000
前期繰越収支差額	25,600,000	当期収支差額(A)-(C)	-5,600,000
収入合計(B)	28,200,000	次期繰越収支差額(B)-(C)	20,000,000

(注) 消費税の処理は税込み方式によっている。

いて
 主要な事項は次のとおりである。①協力会員校は59校、準協力会員校は4校で計63校(国立14、公立3校、私立46校)である。②協力会員校会費は据え置きとする。③事務組織の組織替えに伴い業務課設置整備係を業務委託し、パートタイマー19名の減員を行なう。④宿泊利用者については、平成10年度は長引く不況により、対前年度比5.7%減の約三万八千二百人が見込まれている。平成11年度も厳しい状況が続く中で、協力会員校はじめ各方面への利用促進に努めるほか、大学受験生の宿泊受入れ、大学生協との業務提携及び閑散期割引制度の導入等が検討されているが、利用者数を三万五千人と設定し、これに基づいて前年度より大幅に抑制した収入予算・事業計画を立案した。
 ⑤施設・設備の改修に伴う固定資産の取得及び修繕費が逐年増加しているが、本年度は高圧線路のケーブル化工事、本館1階エアコンの更新、井戸ポンプオーバーホールと井戸清掃、大学院セミナー館鉄部塗装、その他法定点検・保守点検費用等最小限の予算計上にとどめた。ハウスの教育活動への国庫補助金等は、約四十万円の減額が見込ま

れているが、大学共同セミナー、大学院共同セミナー、大学教員懇談会、大学教員研修プログラム、国際学生プログラムに加えて大学職員研修プログラム及び土曜セミナーの試行的開催の実施を予定している。
**平成10年度
第3回共同セミナー委員会正副委員長会議**
 99年2月2日/新宿NSビル
 【出席者】宇波 彰 伊藤孝之 伊藤正直
 【ハウス側】佐野館長ほか企画室スタッフ3名
 ●主な議題
 平成11・12年度委員人事について、次年度セミナーの企画、他。
**平成10年度
第2回大学職員研修プログラム委員会**
 99年2月22日/新宿NSビル
 【出席者】佐藤善志 田邊久夫 松本由紀子
 【ハウス側】佐野館長、本江専務理事ほかハウス職

員3名
 ●主な議題
 委員会の内規について、第1回大学職員研修プログラムの企画、他。
**平成10年度
第4回共同セミナー委員会**
 99年2月23日/アイビー・ホール
 【出席者】宇波 彰 伊藤正直 野崎昭弘 松井孝典 小松 弘 宮島 喬 市村植一郎
 【ハウス側】佐野館長ほか企画室スタッフ3名
 ●主な議題
 第178回大学共同セミナー「科学と社会、そして技術―環境・生命・物質―」、第1回土曜セミナー「知られざるムルナウ」、第2回土曜セミナー「日本の金融危機・アジアの金融危機」の実施報告、第179回大学共同セミナー「社会学入門/みえざる社会問題にどう迫るか」の準備状況、次年度の企画、他。

千人会

99年1月～3月

◆ご入会ありがとうございました

- ◇服部好秀殿 成蹊大学
- ◇柳堀素雅子殿 成蹊大学
- ◇堀井啓幸殿 富山大学助教授
- ▼会員数11、三八五名

◆会費ありがとうございます

- 清水誠、鈴木皇、大森東亜、佐藤共子、後藤聰一、小菅敏夫、吉田光孝、猪瀬博、石井素介、中富光国、田原勘意、高橋恒郎、鶴田忠彦、小林哲也、慶谷壽信、佐々木良一、一番ヶ瀬康子、江幡玲子、松山正男、竹林代嘉、佐藤音彦、本田和子、西川大二郎、小山弘志、森久、岡崎正、本谷勲、清水畏三、新井明、杉山好、武田昌輔、高橋昭三、乾崇夫、志鳥學修、小野寺嘉孝、東川清一、柳父園近、伊藤學、小川政亮、麻生幸、柳澤富雄、上谷琢之、池井優、山田辰雄、根岸愛子、坂本光一、小俣武夫、新保清子、田中国昭、海老澤信一、越智昇、栗田寛、江村裕文、金子ハルオ、石井正博、大川信明、茅野良男、石川道夫、遠藤平治、亀岡篤、出光直樹、板垣雄三、鈴木陽子、北原文雄、鐘ヶ江信光、古田勝久、谷資信、富沢賢治、北村嘉行、服部好秀、寺東寛治、山住正己、今井清一、佐藤光、森昭彦、斎藤真、平木典子、高松正昭、福永寿巳夫、箕輪成男、大岡信、笠耐、小林一彦、泉敏彦、藤井良治、肥前栄一、中村孝之、馬越徹、野沢晨、寺中良二、中村妙子、建部正義、吉田

宏哲、増沢利幸、磯直道、山口俊夫、蓮見音彦、風間邦光、富塚文太郎、島美喜子、西川恭治、柳堀素雅子、田中慎也、竹村五夫、宮腰賢、柘植敏治、折田政博、百瀬宏、高橋誠、白川和雄、一松信、土井恵美子、萩原稔、中田良平、山沢逸平、原一雄、西野万里、三浦永光、中津竹子、熊沢義宣、大山乃富子、寿里茂、麻島昭一、豊田陽子、絹川正吉、大西清、谷口修、木村建一、小原啓義、市川邦彦、箱木真澄、高瀬文志郎、勝見允行、岡村総吾、河村フジ子、梶原豊、手塚千鶴子、加藤六美、福西基、茂木光子、有末賢、小倉芳彦、福田一郎、吉沢四郎、佐藤玉枝、島田治夫、佐藤公孝、木田宏、渡利千波、桜井育子、木村敏美、大河内正陽、鈴木三男吉、岸良範、森山ヨシ子、佐野博敏、柴田泰比古、小原孝二郎(敬称略)

おたより

- 創立の頃を偲び、遠くからハウスの発展を願っています(南紀にて)。鈴木 皇
- 一月はじめのゼミ合宿で来館しました。佐野理事長、本江専務理事によりしくお伝えください。一橋大学教授・鶴田忠彦
- この三月をもって東京都立大学を定年退職いたしました。今後ともよろしく願い申し上げます。東京都立大学教授・慶谷壽信
- お陰様で元気に七十二才を迎えました。大學ゼミナー・ハウスのご発展を祈ります。佐々木良一
- ゼミナー・ハウスが知の支えとして、また教育の原点にもどり今日まで力づけて下さったことを心より感謝致します。松山正男
- 過年度年を迎え、無事退職できましたこと感謝して会費をお送りします。西川大二郎
- 昨年七月義母他界し服喪の正月を過ぎしま

したが一九九八年十二月元気で誕生日を迎えられ、かつ一九九九年の新年を元気で迎えられたことに感謝して、ささやかな送金をさせていただきます。岡崎正

- セミナー・ハウスの繁栄をお祈りします。柳父園近
- 今年のゼミの新年会で故岡先生の思い出話を皆で致しました。皆様のこれからの御活躍を大いに期待しております。厳寒のみぎり皆様にはくれぐれも御身お大切願ひ上げます。武蔵工業大学教授・志鳥學修
- おかげ様で古稀を迎えられました。こちらが年齢を重ねるほどますますゼミナー・ハウスのよきご発展とそこに集う若い学生たちへ祝福を祈らずにおれません。また岡前館長先生のご冥福を祈ります。杉山好
- 誕生日を祝っていただいていたありがとうございます。私もこの日で七九才、もうそろそろこの世からいなくなっても良い事という意味かも知れませんが、なかなかそうもいきそうもありません。小川政亮
- 同年の岡先生が逝かれて淋しくなりました。大學ゼミナー・ハウスの発展と皆様のご清栄をお祈り申し上げます。上谷琢之
- 今年も無事、利用者が沢山あって元気の良なお年でありますようにお祈りしております。新保清子
- 本学の上野敦男教授が十月九日文部省から体育功労者として表彰。賞状と記念品を手にそのままゼミナー・ハウスへ直行してゼミを開始。思い出多き一日となりました。山梨学院大学・海老沢信一
- 昨年は利用させていただき有難うございました。いちだんと居心地よく、食堂も気持ちよく快適でした。またの折よろしくお祈りします。越智 昇
- お陰様で二月末に金婚式を迎えます。

石井正博

●相変わらずに過ごしています。四月のオリエンテーション合宿で、またお尋ねいたします。金子ハルオ

- 誕生日から一月たつてしまいました。申し訳ありません。体調を崩しておりましたので御寛恕下さい。皆々様へ宜しく。大川信明
- 沖繩は日本の中で何なのか？学徒出陣した弟の戦死した土地と思い併せてこの頃しきりと考えます。北原文雄
- 三月末日で定年退職いたします。中学・高校の教師という立場上、利用させていただく機会は少なかったのですがお世話になりました。森 昭彦
- 学生時代の思い出のために入会しました。末永くお付き合い下さい。佐藤 光
- 3月に停年退職で年金生活に入ります。四半世紀前にゼミナー・ハウスで開催された物理教育に関するシンポジウムや、夏季研究会を懐かしく思い出しています。有り難うございました。笠 耐
- 別便にて拙訳のマックス・ウェーバー『ロシア革命論』をお送りします。「あとがき」に書いておきましたように、この訳業を進める中で何度も貴ゼミナー・ハウスのお世話になりました。厚くお礼申し上げ、一層のご発展を祈り上げます。肥前栄一
- パースデイ・カード有り難うございました。岡宏子先生の魂——簡素な生活、常日頃物の本質を見抜く深い思想性、哲学性の精進——はみんなの心の中で育まれ、永遠に生き続けることと思います。小林一彦
- 誕生カード、有り難うございました。今年もまだ頑張っていきたいと思っております。中林孝之
- お心のこもった誕生カードを頂きまして恐縮に存じます。寺中良二

ひとこと

もともと園芸音痴だった私ですが、4～5年前よりガーデニングブームとともに、流行のハーブを育てるようになりました。今では20種類を超えるものがあり、間もなく美味しいハーブを食べに来る虫たちとの戦いの日々が始まります。油断していると、ひと晩のうちに青々と茂っていた葉がすべて食べ尽くされて、茎だけがまるでつま楊枝のように残ってしまうこともあるのです。ある園芸のベテランいわく、虫は見つけても殺さなくていい。放り投げておけば、じきに鳥が見つけて喜んで食べるから、とのこと。なるほど、自然界は実によく出来ている。長年勤務したフロントより昨年秋異動となり、新しい環境で目下勉強中です。



(森 英子・企画室)

●御無沙汰いたしております。飯田先生お元気でいらつしやいますか。お寒い折お風邪などおひきになりませぬよう、ご自愛下さいませ。
●不況の世相の内、ますますのご発展を祈ります。
●岡前館長様のお別れ会に出席させて頂き厚くお礼申し上げます。美智子皇后様の前列のため緊張がございましたが厳粛の中にも大変爽やかなお別れができました。ご冥福をお祈りいたします。
●黄金色に輝く樹木に囲まれた野外ステージのカード、ありがとうございます。元気で六一歳の誕生日を迎えられそうです。

今年も貧者の一灯、千人会会費をお送り申し上げます。
●誕生日カードありがとうございます。始めてセミナー・ハウスを利用して戴いた時の灌木も今や大地にしっかりと根を張った大木に変わり、当時のゼミ生もそれぞれ立派な社会人として成長いたしました。私の教員生活も四十年を越え、この三月には定年を迎えます。セミナー・ハウスのますますのご発展を心からお祈り申し上げます。
●おかげ様で今年も誕生日を迎えることができました。今の時代の人生八十年とすれば、あとは附録の人生です。生涯現役で頑張りたいと思います。

●千人会によって支えられる大学セミナー・ハウスに神の祝福を祈る。今年には教職七十年にちなんで。
●去る三月はじめ、FD委員会で送別会をしていただいていたことがございました。また今度は水戸黄門のような心で大学セミナー・ハウスへお伺いします。その折はどうぞよろしく。
●あの美しいしだれ桜がもうすぐ咲きはじめるころになりました。
●この三月で何とか定年を迎えることができました。もうしばらく千人会に留めていただきたく思います。

●誕生カードありがとうございます。当日は、この度、日本教会成長沖繩研修所所長としての新入生のオリエンテーションの日でした。
●素晴らしいお祝いのカードを有り難うございました。定年退職後も元気に過ごしております。五月には古稀祝賀記念論集を頂戴することになっていて楽しみにしています。
●益々の発展を祈ります。今年もできましたら利用させていただきます。
●「古稀の寿賀」というおことばを頂き、それにふさわしい自覚がないことを知りました。セミナー・ハウスも年輪をこえてステップ・アップしましょう。

●健康でまた会費をお納めできる幸いを感謝します。教育の問題がいよいよ重視されるようになって参りましたが、創立の理念にありまますように、大学間の友情の輪と、研究への刺激が高められますよう祈り上げます(財政的に苦しいことと拝察します)。
●生前のご厚情に感謝し
●謹んでご冥福をお祈りいたします

●誕生カードありがとうございます。当日は、この度、日本教会成長沖繩研修所所長としての新入生のオリエンテーションの日でした。
●素晴らしいお祝いのカードを有り難うございました。定年退職後も元気に過ごしております。五月には古稀祝賀記念論集を頂戴することになっていて楽しみにしています。
●益々の発展を祈ります。今年もできましたら利用させていただきます。
●「古稀の寿賀」というおことばを頂き、それにふさわしい自覚がないことを知りました。セミナー・ハウスも年輪をこえてステップ・アップしましょう。

●健康でまた会費をお納めできる幸いを感謝します。教育の問題がいよいよ重視されるようになって参りましたが、創立の理念にありまますように、大学間の友情の輪と、研究への刺激が高められますよう祈り上げます(財政的に苦しいことと拝察します)。
●生前のご厚情に感謝し
●謹んでご冥福をお祈りいたします

●誕生のお祝いの言葉ありがとうございます。去年は手術のため三ヶ月の入院を余儀なくされましたが、健康は徐々に回復しつつあります。細々ながら研究を続けております。
●元気で六七才の誕生日を迎えることができました。感謝の心をこめて会費を送らせていただきます。

●健康でまた会費をお納めできる幸いを感謝します。教育の問題がいよいよ重視されるようになって参りましたが、創立の理念にありまますように、大学間の友情の輪と、研究への刺激が高められますよう祈り上げます(財政的に苦しいことと拝察します)。
●生前のご厚情に感謝し
●謹んでご冥福をお祈りいたします

寄贈図書

99年1月～3月
●労働・治安刑法論研究 学習院大学 肥前栄一殿
●ロシア革命論Ⅱ 広島大学 小島 基殿
●科学技術と環境 建部正義殿
●はじめて学ぶ金融論 福田一郎殿
●自然とともに 福田一郎殿
●FD論集―私の生涯学習課題として 原 一雄殿
●「学術研究の動向と大学」『いま、大学の臨時的定員を考える』 大学基準協会 川村健爾殿
●「原色日本の美術 全32冊」 今原朝子殿
●「現代美術全集 全25冊」

寄付

98年12月～99年3月
●一般寄付
●四〇、〇〇〇円Ⅱ工学院大学教授 須田精二郎殿
●五、〇〇〇円Ⅱ鈴木順子殿
●(植樹)
●みつばつじ1株Ⅱ生活協同組合コープとうきょう 99年度新入職員殿

第4—四半期の延べ利用者数は八、五五〇（昨年八、八九三）人で、昨年と比較して四〇程度の減少となった。▼団体別でみると、非会員校を除いて、会員校、学術・教育団体、企業社会人団体がそれぞれ15%、38%、5%ずつ減少した。月別で見ると、昨年同期と比較して一月は5%、二月は2%の増加、三月は10%の減少となった。▼今年度から近隣の大学を受験する高校生に宿舎を提供することをはじめたが、初回にも拘わらず延べ97名のご利用があった。一月、二月の閑散期の対策として今後も、拡大する方向で継続していきたい。▼毎年一月から三月にわたる長期滞在が5年間続いた日本インドネシア科学技術フォーラムによるマレーシア留学生プロジェクトは、今期で第一フェーズが終了し、一時ご利用が途絶えることになった。しかし二年後にはまた新しいプロジェクトで再開されるの見通しも伺っている。ぜひまたご利用いただきたい。▼通算20回にわたり当ハウスをご利用いただいた千葉大学武蔵武彦教授には、当ハウスにおける大学の枠を越えての幅広い交流についてご寄稿いただいたが、ハウスの設立趣旨に合致する同ゼミのご利用に感謝したい。▼創価大学と創価女子短期大学の合同によるイタリア研究会は、総勢一四〇名という大勢の参加者にも拘わらず、和気あいあいとした明るい雰囲気の中で規律正しい組織化された合宿を実施された。学生が自主運営しているこの熱気あふれる同研究会の活動とそのユニークな成り立ちなどについて企画運営のメンバーである高橋祐司さんにご紹介いただいた。

私の国際交流

熱い情熱によって誕生した
イタリア研究会

創価大学法学部三年 高橋祐司

本年3月18日の創価大学及び創価女子短期大学の卒業式を目前に控え、八王子の大学セミナー・ハウスにおいて3月13～15日の2泊3日の日程で四大と短大のイタリア研究会（顧問=同短期大学教授・楠田直樹）の合同の春合宿が行なわれた。

今回の合宿では、「イタ研魂 One for all, all for one」というテーマを掲げ、今年本学を卒業する学生による卒業生企画そしてイタリア各地において約一カ月間語学研修をしてきた訪伊団（今年は約50名くらい）の帰国報告会など、新たな一年を出発するにふさわしい充実した内容の合宿を行ない、さらなる固い団結を生んだ。

イタリア研究会の発足は1987年（昭和62年）の12月17日であり、本年で創部以来12年目を迎える。創部当時8名で出発した部員は現在300名近くになっている。創部以来毎年の研究小冊子の発刊、またはイタリア語学研修の実施やイタリア・フェアの開催など実に充実したものであった。

創部のきっかけとなったのは昭和62年の滝山祭（本学滝山寮の寮祭）で、学生が各国語の歌を合唱した際、創立者からイタリア語の歌もあればとの話があり、その創始者の想いに対し応えたいとの学生達の熱い情熱により誕生したのが同研究会である。

昭和63年の創大祭では創立者と学生達との想いが実現し、イタリア研究会を中心として「イル・コーロ」の合唱を行ない、創立者をはじめ参加者から盛大な拍手を受け、その後平成元年の創大祭では、「ジャンパッティスタ・ヴィーコ」についての研究を発表し、創大祭論文大賞を受賞した。このような同研究会の活躍に対し、平成二年四月に、創立者から三指針を頂くことができた。

1. PORTATE L'INTELLETTO A TUTTO IL MONDO 知性を世界に
2. ESSERE SANO È IL REQUISITO PER ESSERE UN LEADER 健康は指導者の要件
3. L'AMICIZIA È UN TESORO DI TUTTA LA VITA 友情は生涯の宝

このようにイタリア研究会は、創立者に見守られて大きく成長を遂げてきた。

さて、本学は創立以来、建学の精神に基づく海外大学との交流が盛んである。イタリアのボローニャ大学との学術交流は平成元年四月、ロベルシ・モノコ総長の来学によって協定が結ばれ、学生交換が開始された。イタリア研究会は、ボローニャ大学への派遣留学生を送るだけでなく、ボローニャ大学留学生との交流を行ない、両大学の実質的交流促進の担い手として活躍してきた。

最後に我が創価大学建学の精神を結びとして書き加えておきたい。

1. DIVENTA RE UN'UNIVERSITÀ D'EDUCAZIONE UMANA 人間教育の最高学府たれ
2. DIVENTARE UNA CULLA DI DONDOLLO PER COSTRUIRE UNA NUOVA CULTURA 新しき大文化建設の揺籃たれ
3. DIVENTARE UNA FORTIFICAZIONE CHE MANTIENE LA PACE D'ESSERE UMANO 人類の平和を守るフォートレスたれ



大学と短大の活気あふれる合同合宿をされた参加者たち——講堂にて

わたしたちの合宿

大学セミナー・ハウスと

武蔵ゼミ

千葉大学法経学部教授 武蔵武彦

これまで何回もお世話になったかすぐには計算できない。前任校の成城学園の頃から数えてもう20年はすぎていることには間違いはない。

今年も2月にお世話になった。このところ新ゼミ生のための合宿を2月に行うようになってきている。ここ数年の暖冬によって免れているが、この時期雪が降らないだろうかという心配も無いわけではない。しかも正確に言うとはまだゼミ生ではなく予定者の2年生だ。

ただこのところ就職活動が早まってきているため、実質ゼミ活動を2月に始めなければ十分な時間がとれなくなってきたという事情がある。いよいよ本格化しようという3年生の就職活動に当たって心構えなどを説く機会ともなっている。幸いなことに、大学セミナー・ハウスは都心にも近く合宿中に会社説明会に出かける3年生もいる。そして卒業生も積極的に参加してくれ、社会人としての自覚を身をもって示してくれている。

このゼミ合宿の特徴はなんと言っても遊びをしないところにある。毎年OB会を催しているが、学校を出て何年も経つ先輩連中の中でいつも話題になるのが、この最初の合宿のようだ。卒業生のゼミの思い出に強烈な印象を与えている。特に言葉に出して言わないが時間の

大切さ、自然のありがたさを感じ取ってくれればと願っている。

この大学セミナー・ハウスの理念はゼミ活動の中にも生かされている。というのは、このところ東京大学三輪ゼミ・慶應義塾大学大村ゼミ・法政大学黒川ゼミとの間で意見交換会・対抗討論会を行っている。大学の枠を離れて幅広い学生との交流は得るもの大きいと思われる。未だ実現していないが、今年も合宿に参加してくれた十文字学園の込江雅彦君のゼミ生とは大学セミナー・ハウスで会いたいものだと思うている。



卒業生にも強烈な印象を残しているという千葉大学武蔵ゼミの合宿に参加された皆さん。前列左から2人目が武蔵先生——野外ステージにて

花ごよみ セミナー・ハウス キャンパスの植物

ヤマユリ

花は直径20cm位になり、ユリの中でも最大級のものです。1茎に4～5花、生育が良いと10花もつけることがあります。花弁は白地に黄色いすじと赤い斑点があり、開花すると濃厚な甘い香りがあたり一面に漂います。黄白色の大きな球根には苦味がなく、食用にもなるそうです。

ヤマユリは八王子市の市の花でもあり、ハウス敷地内にも広範囲にわたり自生していますが、残念ながらその数は以前に比べ激減してしまいました。また球根を増やして、一面にヤマユリ、というかつでの景観を取り戻したいと思っています。6月中旬～7月中旬が見頃です。



利用状況

■ 1月(24グループ、延二、三二九人)
一橋大学教授 日本大学保健体育審議会自動車部 武蔵大学講師 一橋大学教授 日本大学助教 東海大学教授 中央大学教授 帝京大学講師 東京外国語大学助教 中央大学教授 法政大学助教 桜美林大学助教 東京神学大学第30回教職セミナー 第17回大学教員研修プログラム 郡内研究会

99年1月、3月
* 同月2回利用
* 同月3回利用
日帰り利用はグループ数のみ
(延べ人数には日帰り利用者
は含まず)

マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシア
科学技術フォーラム)
日本グループワークトレーニング協会
日本コンチネンス協会
朝日カルチャーセンター・横浜
日立製作所労働組合武蔵支部
(個人利用)
東京大学
立教大学助教
第2回土曜セミナー
東京外国語大学フォーシーズンズ
日本女子大学教授
東洋大学教授
中央大学助教
東京大学財政自主ゼミ
明治学院大学助教
桜美林大学ELP教員研修会
帝京大学「明日の会」
中央大学経済学部行事実行委員会
学習院大学助教

鶴田 忠彦
須島 充昭
後藤 範章
下浦 享
渡邊 啓貴
和崎 春日
金原 左門
森田 明
増田 正人
酒井由美子
田島 信元
大岩圭之助
藤田 実
数土 直紀

駒澤大学教授 瀬戸岡 紘
 中央大学音楽研究会 日本ネイチャーゲーム協会
 明治大学教授 根本 孝 日本建築家協会関東甲信越支部
 青山学院大学教授 日本山岳協会
 日本大学教授 寺東 寛治 日本POP広告協会
 法政大学教授 角田 収 アテネコンピュータシステム
 日本大学教授 加太 宏邦 〈個人利用〉
 中央大学書道部 生田 真司 中央大学*
 中央大学混声合唱部 日本女子大学助手
 中央大学教授 庄司 興吉 〈日帰り利用〉
 中央大学キリスト者学生会 野猿峠シルバークラブ
 中央大学助教 久保 文克 ■3月(58グループ、延四、一二二人)
 明治大学学生保険委員会 杏林大学教授 埼玉大学教授 山口 和孝
 明治学院大学教授 橋本 敏雄 帝京大学教授 加藤 勝郎
 東京学芸大学幼稚園科教室 駒澤大学助教 駒澤大学助教 寺中 良二
 立教大学教授 松平 信久 早稲田大学絵画会 谷敷 正光
 明治学院大学II部体育会執行部 中央大学教授 中央大学教授 大須 真治
 千葉大学教授 武蔵 武彦 千葉商科大学教授 菅沼 憲治
 東京都立大学教授 石井美智子 明星大学通信教育部 早稲田大学ローバース
 杏林大学教授 椎名 和男 早稲田大学ローバース 東京理科大学教授 狩野 紀昭
 早稲田大学教授 早稲田大学教授 千葉大学教授 千葉大学教授 工藤 秀明
 明治大学教授 西野 万里 早稲田大学教授 早稲田大学教授 松田 修一
 日本大学教授 北脇 敏一 駒澤大学助教 駒澤大学助教 東條 光雅
 中央大学合唱団 外山 公美 国際基督教大学和太鼓部 中央大学教授 林 昇一
 日本大学助教 長谷部秀孝 東京大学比較文学比較文化研究室 東京大学比較文学比較文化研究室 平山 正実
 創価大学教授 聖学院ハンドベルクワイア 聖学院大学・女子聖学院短期大学キリスト教八 大妻女子大学教授 江原由美子
 王子合宿 マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシア 聖学院大学・女子聖学院短期大学キリスト教八 大妻女子大学教授 播 里枝
 科学技術フォーラム) 明治大学教授 東京学芸大学講師 上智大学キリスト者学生会 浅野 智彦
 受験生 万国ローアバプテスト福音伝道協会 埼玉大学助教 伊藤 孝

千葉大学助教 佐藤 宗子
 早稲田大学講師 高瀬 浄
 中央大学教授 長内 了
 横浜国立大学教授 長縄 光夫
 桜美林大学教授 石井 敏
 明治学院大学教授 水谷 史男
 獨協大学教授 大竹 孝司
 創価大学イタリア研究会 宮川 淑
 東京会計法律学園教職員研修*
 獨協大学教授
 創価大学国連研究会
 哲学研究会
 十大学合同セミナー
 第179回大学共同セミナー
 首都圏ファンタジーグループ研究会
 言語研究会
 横浜「言語と人間」研究会
 マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシア 科学技術フォーラム)
 受験生
 システム連合
 ヘルスカウンセリング学会
 葵ゼミ
 日本国際交流振興会
 青年心理学研究会
 文学教育研究者集団
 基準点測量自主研修会
 ヒューマンライフセンター
 医療法人永生会リハビリテーション医科学研究会
 多摩中央信用金庫八王子支店 学究社
 生活協同組合コープとうきょう
 〈個人利用〉
 お茶の水女子大学 本郷 朝香
 中央大学 佐田 啓二

開催予告

第180回大学共同セミナー
 現代社会と人間存在―変容する世界と人間―
 '99年7月25日(金)日の2泊3日

【テーマと講師】

- 現代における「共同性」はどのようにして可能か―企画と趣旨と講師の紹介―
見田 宗介(共立女子大学)
 - 言語以前のからだ、言語に組み込まれたからだ(青年と他者)
竹内 敏晴(南山大学)
 - 子どもの身体の現在と未来
―どう変わったか、どう変わりうるか―
鳥山 敏子(賢治の学校)
 - こころの「病」と「癒し」と
―臨床心理学の現場から―
井上 信子(日本女子大学)
 - 「母への依存」のあと
―臨床社会学の視点から―
平山 満紀(江戸川大学)
 - 魂にふれる福祉へ
―社会福祉の現場から―
加藤 彰彦(横浜市立大学)
- 募集人員…約70名 ■対象…国公立大学、短大に在籍する学生学年、学科を問わない(および社会人) ■参加費…一、二、〇〇〇円(社会人は一五、〇〇〇円) ■申込締切…6月24日(木) ※定員に達しない場合は締切り後も引き続き申し込みを受け付けますので、お問い合わせ下さい。

第36回大学教員懇談会
 入りやすく、出にくい大学?―大学審答申への対応―
 '99年7月10日(土)日の1泊2日
 【テーマと講師】

1. 大学審議会答申をめぐって—とくに教育

研究システムの柔軟構造化について—

大南 正瑛 (立命館大学教授・理事)

2. 大学文化の変容と教員評価

絹川 正吉 (国際基督教大学学長)

3. これからの大学はどうなるか

黒田 玲子 (東京大学大学院総合文化研究科教授)

4. 「教養学部一九九四年度前期国際文化

論」の悲慘

平野 健一郎 (早稲田大学政治経済学部教授)

■募集人員：約60名(先着順) ■対象：大学

の教職員 ■参加費：一五、〇〇〇円 ■申

込締切：6月30日(水)

第1回大学職員研修プログラム

99年7月14～15日(水～木の1泊2日)

【講師】

有馬 朗人(文部大臣)

小日向 允彦(浦工業大学常務理事)

桐原 保法(ソニーサービス株式会社社長・

共同セミナー委員)

充実した大学教育を実現するためには、その衝に当たたる設置者、管理運営の責任者、そして何よりも職員の理解と尽力が必須である。管理運営に携わる人達を対象としたスタッフ・ディベロップメントは、大学の枠を越えて共通に取り組むことができる面も少なくない。本年度より(財)大学セミナー・ハウスは新たに独自のプログラムの開発、資料の作成を進め、研修会を企画するための「大学職員研修プログラム」を発足させた。

■募集人員：約70名(先着順) ■対象：大学の管理運営の責任者を問わず、大学改善に関心のある方 ■参加費：二〇、〇〇〇円

申込締切：7月5日(月)

●お問い合わせ先：

大学セミナー・ハウス企画室

TEL：0426768532

FAX：0426760266

E-mail：jush-kikaku@nub.biglobe.ne.jp

URL：http://www.mesh.ne.jp/jush/

出版物のお知らせ

大学力を創る：FDハンドブック

99年3月31日発行 割引価格二、〇〇〇円

(税込)

執筆：絹川正吉／示村悦二郎／岡 宏子／原

一雄／井下 理／宮腰 賢／山内正平／

福田一郎／佐々木一也／建部正義／丹羽

泉／中田良平／蛭山道雄／亀山純生／小

林志郎／清水一彦

寄稿協力：野田一郎／森平爽一郎



学生の知の欲びへの起爆剤となる授業を！FDの中核は授業の改善だ！シラバス作成から成績評価まで、長年の授業体験に基づき練り上げられた、教員と学生の生き生きとした相互交流を導き出す、授業現場の改善、教員能力開発のための具体的な指針を満載す

る。

●ご注文は大学セミナー・ハウス企画室へ。

TEL：0426768532

FAX：0426760266

E-mail：jush-kikaku@nub.biglobe.ne.jp

ホームページをご覧下さい

大学セミナー・ハウスでもインターネット

のホームページを開設しております。主な内

容は、ハウスの歩み、交通案内図、出版物、

施設使用料、教育プログラムの開催予告など

で、常に最新の情報をお届けする一方、ご意

見やハウス主催のプログラムへの参加のお申

し込みもいただけるようにいたしました。ど

うぞご覧下さい。

ホームページ：http://www.mesh.ne.jp/jush/

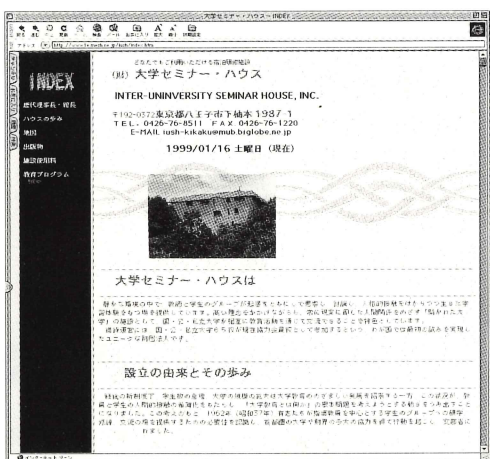
●お問い合わせ先：

大学セミナー・ハウス企画室

TEL：0426768532

FAX：0426760266

E-mail：jush-kikaku@nub.biglobe.ne.jp



館長室から

暖冬の声に欺かれて早々に咲いてしまった花を驚かせる花冷えが続いている。故岡宏子先生が愛されたセミナー・ハウスの枝垂れ桜も、戸惑いながら季節を迎えているのかごとき風情であるが、この四月で先生が逝去されて一年になる。深い悲しみのあとではあったが、通信教育のスクーリング、受験生などの利用、土曜セミナーの試行、大学職員研修プログラム、ホームページを通してのハウスの諸活動への全国各地からのご参加等々、新しい企画や新しい利用者の増加などには展望の開ける面もみられた。これはセミナー・ハウスの理想の灯火を維持すべく職員一同の心をあわせた努力と、関係各大学・団体さらにはご利用戴いている個々の諸先生方各位の御鞭撻のおかげである。

世の中の景気の冷え込みや社会通念の急速な変化など、なおハウスには、多くの難題がもたらされ心配の種は尽きない。病床で「八割までは問題を整理しました。全部片付けて先生にお委せしようと思いましたが、このくらいで勘弁して下さい」と私に言われた岡先生の微笑を思い出しつつ、その二割から先生の八割の長い間の大変な御苦労が偲ばれるが、残された二割がさらに膨れ上がらぬよう、そして幾らかでもその克服にと努めている。枝垂れ桜にもまして穏やかな季節の到来が待たれる昨今の天気である。

表紙の写真は今年になって巣箱を設置したところ、3月に入り巣作りを始めたシジュウカラの撮影に成功(図書館付近)。

セミナー・ハウス

1999年1・2・3月分(年4回) 発行=財団法人 大学セミナー・ハウス 第154号 定価：200円

発行=財団法人 大学セミナー・ハウス

〒192-0372 東京都八王子市柚木1987 TEL 0426-76-8511 FAX 0426-76-1220 振替口座 00150-1-74590

発行人=佐野 博敏

編集=大学セミナー・ハウス企画室 制作=中山企画

SEMINAR HOUSE

The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House No.154 (January~March, 1999)